

# *Eternal Star*

綾瀬麻結

## 目次

Eternal Star	5
ブーケに愛を込めて	269
誘惑☆ラブゲーム	291

Eternal Star

## 第一章 憧れと初恋の狭間で

千佳が初めて男性を好きになったのは、入社一年目十八歳の夏だった。

「君が、鈴木千佳さん？」

「は、はい！」

会議室に重要書類を置き忘れていないかどうか、確かめるのが新人秘書の役目。廊下で管理職の社員たちが出ていくのを待っていた時、突然千佳は声をかけられた。

視線を上げると、目の前にはアシスタントの男性を後ろに従えた一人の青年が立っていた。

入社してまだ間もない千佳でも、彼が誰なのかすぐにわかる。水嶋グループの次期社長と言われている御曹司。まだ二十代の水嶋一貴だ。

そんな雲の上の存在の彼に、千佳は優しく声をかけられた。

「鈴木さんの資格を見せてもらったよ。遊びたい盛りの高校生の時に、よくここまで勉強してきた。人生経験は少ないかもしれないが、大卒者にも決して劣らない実力を持っている。他の新入社員は君より年上だが、そんなことは気にせずに仕事に励んで欲しい」

「は、はい！ ありがとうございます」

頬が火照ってくるのを感じながら、しつかり腰を曲げて深々と頭を下げた。

一目惚れだった。

入社してまだ数ヶ月しか経っていないというのに、御曹司に名前を覚えられていた事実には、千佳はかなり舞い上がった。

これで恋に落ちない女性なんているのだろうか？

男性と付き合ったことも、男性から興味さえ抱かれたこともない千佳が、御曹司に恋に落ちてしまふのは当然の成り行きだった。

さりげなく声をかけてくれた御曹司は、いつも付き従えているアシスタントと話をしながら、千佳から遠ざかっていった。

その背中を、ずっと見つめずにはいらなかった。

父が不況の煽りを受けリストラされたのは、千佳が高校生の時だった。家計を支えるために、毎日バイトに明け暮れる日々を送った。高校を中退して働こうとさえ思ったが、両親がそれを許してはくれなかった。それならばと学校では必死に勉強をし、将来の助けになるような資格を一つずつ取得していった。

それが、功を奏した。

地方にも支社を持つ水嶋グループは、大学卒業者のみを採用する大企業として知られている。だが、千佳はコネも何もない高卒という立場ながらも、有名一流大学出身の志願者たちに混じっ

て面接を受け、最終まで残ることができた。

しかも、憧れの職場として名高い東京本社秘書室勤務という職まで得る。

高卒採用第一号者として、千佳の名前は社内報にも載った。

それを見た御曹司が、人事部から千佳の履歴書を取り寄せた。暗黙の了解として知られている「高卒は一切採らない」というルールを、あえて無視した面接チームを呼び出し、彼らの先見の明を称えたという事実を知っていれば、ここまで御曹司を好きになることはなかったのかもしれない。

だが、そんなことを全く知らない千佳は、御曹司が千佳自身に興味を持ってくれたのだと思った。ガリガリで貧乳、器量も十人並みで人から注目を浴びたことは一度もない。バイトや勉強ばかりしていたせいで友達がおらず、千佳はずっと一人ぼっちだった。

そんな彼女を初めてきちんと見てくれたのが、御曹司だった。

だから、千佳は御曹司に対して自然と胸の高鳴りを覚えたのかもしれない。

もちろん、女性社員たちの憧れの的と付き合えるとは思っていない。

付き合うとはどういう感じなのか全く想像すらできないが、初めて男性に興味を抱いたその感情が、恋なのだとただだけはわかった。

恋をしていることを隠しきれないほど、夢中になって御曹司の後ろ姿を追うようになった秋頃、千佳の周囲で変化が起こった。

千佳の姿を見つめる男性が、突然現れたのだ。

もちろん千佳の視線は全て御曹司に向けられていたので、誰かに見られていることになど全く気

付かなかった。

御曹司を見つめるだけで、幸せいっぱいだったから……

「優貴さん？」

「わかってる……今行く」

アシスタントが問いかけると、二十三歳の水嶋優貴はすぐにそう答えた。

優貴は、千佳が恋をした御曹司の弟の一人だった。

表情を崩さず、冷静さを武器にして仕事に取り組む彼を、社内では知らぬ者はいない。

鋭い視線を向けられた他の社員たちは、へびに睨まれたカエルのように何も言えなくなってしまう。優貴は、そういう人物だった。

優貴はしばらく千佳をジッと見つめていたが、背を向けるとその場から立ち去った。

——一月。

彼が室内に一步踏み込むと、ざわざわしていた管理職専用会議室に静寂が訪れた。

だが、会議室が静まり返るよりも前に、千佳は異変を感じ取っていた。急に息ができなくなり、産毛が総毛立ったのがわかったからだ。

（また、見られている……どうしてわたしを見るの？ わたし、水嶋さんの機嫌を損ねるようなこ

とをした覚えはないのに)

既に席に着いているのは、エリートコースを走ってきた四十代後半から五十代後半までの貫禄のある管理職の人ばかり。

その人たちが一瞬で口を閉じてしまうほどの人物、ここまで千佳を狼狽うろたえさせる人物とは、水嶋優貴だった。

水嶋グループ創立者の孫で、現社長の息子の一人。跡取りの長兄を支えるために、経営本部経営管理室に籍を置いている。

優貴はいつも髪を後ろに軽く撫でつけ、ブランドスーツを着こなしていた。しかも、整った眉毛の下にある双さの目は、見落とすものなどないかのようにいつも鋭い眼光を放っている。

「失礼します」

背中まで届くほどの長い黒髪を、後頭部でしっかりとシニヨンに纏まとめた千佳は、会議室に設置されたテーブルに沿うように歩いた。一階にあるカフェから取り寄せたブレンドコーヒーとミネラルウォーターを置き始める。

入社してから十ヶ月、千佳は資料を配る先輩秘書のアシスタントとして、飲み物を用意していた。早く用意を済ませて出ていかないと、また先輩に小言を言われてしまう。

だが、優貴の視線が千佳の華奢な軀からだを観察するように眺めているとなると、手が勝手に震えてしまつて機敏に動けない。

(ダメよ、しっかりしなさい！ もうすぐ御曹司が会議室に入つてくる。わたしは、御曹司に無様

な姿なんか見られたくないと思つているんでしょ?)

その時、会議室の空気が一瞬で変わった。

「そのままでいてくれ。就業時間を過ぎているというのに悪かつた」

御曹司が、アシスタントの妹尾せのおと共に会議室へ入つてきた。

少し乱れた髪を整えようとみせず、皆に頷いて挨拶をしながら席に座つた。未来の社長だというのに、茶色のファッション眼鏡が雰囲気柔らかく見せている。

眼鏡をしている姿は初めて見たが、いつもと違って謎めいた雰囲気かを醸かし出していた。しかも年上の妹尾をアシスタントにし、命令を下すその姿には惚れ惚れしてしまう。

いつもなら秘書らしく冷静な態度で行動する千佳だったが、御曹司が同じ場所にいるとなると自然と頬が染まる。

火照りを気にしないようにしながら、コーヒを置こうとしたその場所に、いきなり手が伸びてきた。カップが当たり、中身が波打つ。

「申し訳ありません！」

当たった人物を見ると、彼は御曹司の弟の優貴だった。

二人の視線が絡まり合うと、千佳の軀が恐怖で一瞬震えた。御曹司の前で叱責しつせきされると思うと、今度は恥辱から顔が赤く染まっていく。

だが、優貴は千佳と視線を合わせるだけで、何も言わなかった。

「……申し訳ありません」

再びそう言うと、千佳は隣に座る御曹司の元へ行きコーヒーを置いた。

「ありがとう、鈴木さん」

千佳の目が輝いた。

「……熱いので気を付けてください」

さらに頬を染めてそう告げると軽く会釈をし、そのまま会議室を後にした。

秘書室に戻ると、他の人たちは既に退社していた。

「今日の会議って、御曹司二人の目に留まるチャンスだったけど、それでもやっぱり残業は嫌だわでも、会議室の後片づけはしなくていいのがせめてもの救いよね。デートができなくなるもの」

愚痴を言いながら、先輩秘書の二人は帰宅する準備を始めたが、その前に千佳のデスクに一つの封筒を置くことを忘れなかった。

「鈴木さん、これ今日中にファイリングしておいてくれる？」

「……はい、わかりました」

先輩から仕事を回されるのはもう日常茶飯事だったので、千佳は文句一つ言うことなく引き受けた。もし何か言えば、先輩の機嫌が悪くなるに決まっている。平穩に過ごしたいのなら口答えはせず、できる範囲のことをすればいい。千佳が高校時代に学んだ、世渡り術の一つだ。

「じゃ、よろしくね。終わったら帰っていいから」

「はい、お疲れさまでした」

鞆を手にして更衣室へ向かう先輩たちを見送ると、千佳はゆっくりと椅子に座った。

時刻は既に二十時を回っている。上手くいけば、二十一時には全て終わることができるだろう。

「さあ、しつかりしなさい！」

奮起を促すように声を出すと、封筒に入った書類を取り出した。一通り目を通してある程度区分わけすると、それを持って奥にある資料室へ入った。

どれぐらい時間が経ったのだろうか？

全てのファイリングを終え、入り口に置いてあるファイルに保管場所を記入している時、突然男性の声が響き渡った。

「誰かいるのか？」

その声に、千佳はビクツと震えた。とてもよく通る声。誰にも有無を言わせない声音を発する人がいったい誰なのか、確認しなくてもわかる。一度聞いたら、二度と忘れることはできない。

千佳は、恐る恐る秘書室へと視線を向けた。電気が点けばなしのその部屋に、男性が姿を現わした。

何かの視線を感じたのか、彼の顔がゆっくりと動いた。千佳の姿を認めると、射貫くような視線を投げつけてくる。

「す、すみません……。わたし、仕事をしていたので……。でも、もう帰りますから！」

（お願い……。わたしに近寄らないで。そのまま、わたしを無視して！）

目を伏せながら、千佳は心の中で必死に叫んでいた。にもかかわらず、絨毯が映るその視界に、

男物の革靴が飛び込んでくる。

千佳は、飛び上がるほどびっくりした。

「……もう、仕事は終わったのか？」

「はい、もう終わりです」

あと二つ三つの記入が残っているが、それは明日入社してすぐに書き込めば済むこと。彼に仕事は終わったと気付いてもらえるように、ファイルを棚に戻した。男性用コロンが千佳の鼻腔を擦る。それほど彼が、千佳の側にいるということだ。

このまま、彼の近くにいることはできない。早く帰ろうと思って勢いよく振り返ると、何かにつかた。やっと面を上げた千佳の目の前には、こちらを見下ろす水嶋優貴がいる。

(どうしてわたしを放っておいてはくれないの？ いったいわたしが何をしたというの!?)

「そう、か……」

言葉を詰まらせながら、優貴がポソッと呟いた。優貴が千佳に声をかけたのは、これが二度目だった。

一度目は、今日のような会議が行われた昨年の秋頃。いつものように御曹司が入ってきた時、千佳は職務も忘れて、ポツと頬を染めながら御曹司に見とれていた。頭では早く仕事に戻らなければいけないとわかっていたのに、どうしても視線を逸らすことができない。

そんな千佳を「仕事に戻れ！」と一喝したのが、目の前にいる優貴だった。

御曹司を見つめていたと知られたこと、その彼の前で叱られたことがとても恥ずかしく、すぐに

謝るとその場から逃げるように立ち去った。

それ以降、優貴から声をかけられることは一度もなかった。

だが、千佳が本社ビル内を動き回っていると、時折強い視線を感じるようになった。ふと振り向けば、資料を手に持った優貴が立ち止まって千佳を見ている。

そういう視線を頻繁に感じるようになると、千佳はだんだん彼のことが怖くなった。

彼は千佳がもつとも苦手とするタイプで、一生関わり合いたくなくないと思ってしまうような人物。

平穩に過ごしたいのなら、目をつけられないようにするのが一番だ。

それが、千佳の本音だった。

優貴の視線を感じても、今までは言葉を交わすことはなかったので、千佳は心のどこかで安心していた。

だが、今……彼がその垣根を飛び越えてきた！

「……すぐに、電気を消しますから」

「電気を、消す!？」

突然、優貴が驚いたように声を上げた。何故、目を大きく見開いて千佳を見つめてくるのかかわらない。

「はい。仕事を終えた以上、節電を心がけるのは社員として当然のことですから」

優貴から離れるように少し身を引くと、声が震えないように努めながら告げた。

「ああ、そうか……節電か。つつきり俺は……」

その次に何の言葉が続くかわからなかったが、千佳は早くこの場から去りたくて仕方なかった。「すみません、そろそろ失礼いたします」

軽く頭を下げると、優貴の軀からだに触れないように、側を通り抜けた。優貴と距離をおけたことに、ホッと息をついた瞬間だった。

「鈴木さん……俺と、夕食に行かないか？」

（夕食!? 御曹司の弟でもある優貴さんと? そんなの、わたしには絶対にできない!）

千佳は恐怖に顔を引き攣つらせながら、勢いよく振り返った。

「申し訳ありません、わたし……お断りさせていただきます」

ペコッと頭を深く下げると、逃げるように自分の席へ戻り鞆たもとを手に取った。

（助けて……誰か助けて! わたし、誘いの断り方なんて知らない。こんな態度を取ってもいいのかさえもわからない。でも、わたしは早く……彼から逃げ出したい!）

軽いパニック状態だった千佳の耳には、周囲の音は全く聞こえなかった。頭の中で雑音がずっと鳴り響いていたので、優貴が素早く動き出したことにさえ気付かない。

優貴に電気を消すと言ったことも頭になかった千佳は、そのまま廊下へ逃げ出そうとした。

その時、千佳の華奢な手首に強い力が加わった。痛いと思うと同時に、いつの間にか優貴が千佳を見下ろしていたことに気が付いた。

その顔は、どこか鬼の形相に似ている。恐怖の聲が口から出そうになったまさにその瞬間、優貴の顔が近付いてきた。何をしようとしているのか理解できないまま、千佳は優貴に奪うようなキスをされた。

をされた。

ファーストキスだった。

突然触れた柔らかな感触に千佳は叫び声を上げたが、その声は全て優貴の口の中に吸い込まれた。口を開いたことにより、生温かいねっとりとした感触が千佳の舌を絡め取る。

それが優貴の舌だとわかった時、千佳の軀は一瞬で硬直した。そうかと思えば、痙攣けいれんを起こしたようにプルプルと震え始める。

しかも、意思とは無関係に軀の芯が熱く火照り出した。誰にも触れさせたり見せたりしたことの無い秘部が、脈打つように蠢うごめき出す。

今まで体験したことのない軀の変化にビクリすると、優貴の胸を思い切り押しつけて彼の抱擁ほうようから逃げ出した。

足がガクガクと震えてよろめきそうになった。こちらを無表情のまま見下ろしてくる優貴に視線を向ける。

優貴の唇が光っていた。思わず、千佳も手を上げて自分の唇に触れた。優貴にキスされたことで、少し腫はれているように感じる。

「どうして……、どうしてこんな真似を?」

言葉にしたことで、千佳の中でいろいろな感情がぶつかり始めた。それを象徴するように、双まぎの瞳から涙が零こぼれ落ちる。

（どうしてわたしにキスなんてしたの? しかもいきなり! こんな扱いを受けなければいけない

なんて。ファーストキスは御曹司としたかった……それが無理でも、せめて好きになった人としたかった……)

「……千佳」

名字ではなくいきなり名前を呼ばれて、千佳の頬は真っ赤に染まった。キスをされたことよりもさらにいけないことをしているような感覚を覚えた。

優貴が何かを言い出す前に、千佳は彼に背を向けて走り出した。足音が全くしない絨毯の上を走り、一般の女子社員とは別に設けられた秘書専用の更衣室に逃げ込む。

息を弾ませながら、ロッカーを開けた。扉の内側に貼り付けられた鏡に、千佳の顔が映る。

涙で光る瞳を見た後、赤く腫れた唇へ自然と視線が落ちた。あまり面識のない優貴から乱暴されたのだから、もちろん心はとても苦しかった。

にもかかわらず、千佳の頬はほんのり染まり、喜びが溢れ出しているように見える。

(何、この表情。いきなりキスされて怒っているんでしょ？　なのに、どうしてわたしは……恋をしている女性のように輝いて見えるの？)

恋とは、縁遠い学生生活を送ってきた。御曹司に恋をしてはいるものの、他の女性社員のように付き合いたいという強い気持ちを抱いてはいない。

ただ、御曹司を想うだけで幸せだった。彼を見るたび、頬が染まるその瞬間に幸せを感じていた。それなのに、御曹司を見た時と同じように、優貴のキス一つで千佳の頬がピンク色に染まるとは思いもしなかった。

(わたし……いったいどうしてしまったの？　優貴さんを、好き……なの？)

その考えに、千佳は一瞬で青ざめた。

無理やりキスを奪うような相手を好きになるとは、正気の沙汰ではない。むしろ、嫌いになるのが当然だ。

とんでもないことを考えてしまう前に、千佳は急いでロッカーから通勤着を取り出す。

秘書は私服で良かったが、千佳は通勤着と仕事着とは別にしている。上着に手をかけた時、指が胸元を掠った。その瞬間、千佳は思わず呻き声を漏らした。

「うっ……」

乳首が、異様なほどピリピリしている。寒さが原因で乳首がツンと硬く尖ることはあっても、意思表示するように痛むのは初めてのことだった。

「これは、いったい何なの？」

病気が何かだと思った千佳は、思わず泣きそうになった。

新しい仕事に就いた父だったが、それでも以前に比べて収入は少ない。給料のほとんどを家に渡している千佳にとって、余分な出費のことを考えたくはなかった。

病院に行つて診てもらった方がいいのかもしれないが、家でゆっくりすればこの症状は治まると信じたい。

その考えに縋りたかった千佳は、急いで服を着替えるとすぐに更衣室を出た。

どこかで優貴が待ち伏せしているのでは……という考えが脳裏を過ることはなかった。ただ、早

く家に帰り着くことだけを考えていた。

優貴は、そんな千佳をロビーの片隅からジッと見つめていた。

——四月。

ファーストキスを奪われて以来、千佳は自分の感情を持って余していた。

あれから何ヶ月も経ち、既に季節も春を迎えたというのに、心は全く成長していない。

好きなのは、御曹司唯一人。彼が悠然と歩く姿を一目見られるだけで、心がほんわかと温かくなつて幸せを感じる。

……そうだった、はず。

目の前に積まれた書類を見ながら、千佳はため息を一つ吐き出した。

最近、自分でも全く理解できない感情が生まれていた。それをどう表現したらいいのかわからない。(好きな人以外の男性のことが、こんなにも気になってしまふなんて……。これって普通なの？ それとも、わたしが変なの？)

優貴にキスをされた翌日から、突然彼の行動が変わったことを千佳は思い返す。

今までは遠くからこちらを見つめるだけだったのに、千佳が残業で一人秘書室にいるのを見計らつては、優貴が現れるようになった。

そして、必ず千佳を夕食に誘う。その誘いを、千佳は毎回丁寧に断る。そういうことが、週に三

回の割合で繰り返されるようになった。

千佳の頭から御曹司の姿が霞み始めてきた二ヶ月前、御曹司も出席する会議が開かれた。いつもなら、御曹司に声をかけてもらえるかもしれないと期待しながら仕事をする。

だが、今回は御曹司のことよりも、御曹司と一緒に出席する優貴のことが、千佳の頭から離れなかった。

軀を舐めるように見つめてくる優貴の視線に軀を震わせながら、いつものように仕事をした。優貴に飲み物を出すために側へ近寄った時、彼の男性用コロンが千佳の鼻腔を擦った。

たったそれだけで、秘書室内の資料室で二人つきりになったこと、キスをされた時のことを思い出してしまう始末。慣れたように舌を挿し入れられて舐められたことが脳裏に浮かぶと、乳首が痛いほど張り詰めていくのがわかった。

その時のことを脳裏から振り払うように、千佳は小さく頭を振った。

(わたし、本当にどうしたの？ 優貴さんと関わり合いたくはないと思ってるし、毎回誘われるのも迷惑だと思ってる。なのに、どうしてわたしは……。こんなにも時間を気にしてしまうの？)

千佳は、秘書室で自分の椅子に座りながら、壁に掛けられた時計へと視線を向けた。

あと数分で、時計の針が二十時三十分を指す。そして、優貴が秘書室に現れる……。ゆっくりと瞼を閉じて、千佳は膝の上で握り拳を作った。

(待っているの？ 優貴さんが、わたしの前に現れるのを？ こんなにも怖いと感じる相手をも？) 何故、こんな気持ちになるのか全く理解できない。

突然、肌がゾクツとした。誰かに見られているような錯覚を受けて、目を開けて周囲を見回すも誰もいない。

きつと、優貴のことを考えていたからだろう。

千佳は肩から力を抜くと視線を膝に落とし、これからどうすればいいのか再び悩み始めた。親しくしている女性や、友達と呼べる人がいれば相談もできただろう。そういう人が、一人として側にいないことがとても悲しかった。

だが、たった一人だけ……千佳の脳裏にある女性が思い浮かんだ。千佳の目の前の席に座る、同期の桜田だ。

千佳に話しかけてくれるのは、社交辞令だと思っていた。高校時代も仕方なさそうに声をかけられたことがある。その時の苦い記憶が今でも脳裏から離れない。

そのため、優しく接してくれる桜田とも、親しくはできなかった。その彼女に、いきなりこんな話をしたら引かれてしまうに決まってる。

誰にも相談できないのであれば、自分で何とか考えるしかない。この不安定な気持ちから抜け出す方法がないのか、千佳は必死で考え始めた。

この状況から脱却したいのなら、いつもと違うことをすれば、また気持ちに変化が起きるかもしれない。

夕食の誘いを断らずに承諾すれば、違ったことが起こる？  
優貴のことを怖いと思っっているのに、二人で食事をするなどできるのだろうか？

いくら考えても答えは出てこない。

千佳は、再びため息をつくどゆっくりと面を上げた。そろそろ優貴が現れる時間だったので、視線を秘書室の入り口へと向ける。

思っていたとおり、そこには既に優貴が立っていた。

だが、彼を見ながら千佳は訝しげに目を細めた。

(えっ？ あれは、優貴さん？)

何かがおかしかった。千佳の本能が、彼は優貴とは違うと叫んでいる。

でも、何が違うのか千佳にはさっぱりわからなかった。

ジツと彼を見つめると、突然女性を蕩かすような笑みを向けてきた。そのことに、千佳は驚愕を隠せなかった。

優貴のことを詳しく知っているわけではない。彼とはいつも同じ言葉しか交わさないし、二人つきりになった時でさえ、こんなにも人懐っこい笑みを向けるようなことはなかった。

千佳は、入り口に佇んでいる彼をさらに観察し始めた。

すると、いくつか異なる点が見えてきた。髪を後ろに撫でつけてる優貴とは違い、彼は今風に髪を無造作に遊ばせている。そして、優貴にはない笑い皺が微かに目元にある。

それは、いつも笑っている証拠。優貴には、決して当てはまらないもの。

だが、優貴と背格好や目元や口元、鼻の形までが瓜二つだ。

つまり、彼は社内の女子の間でも噂になっているもう一人の御曹司だ。優貴とは一卵性双生児で

彼の弟にあたる水嶋康貴。

同じ顔、同じ目でこちらを見てくるのに、何故何も感じないのだろうか？ 相手が優貴だと、あんなにも恐怖を覚えてしまうのに。

千佳は秘書の仮面を被ると、冷静に椅子から立ち上がった。

「何かご用でしょうか？」

「えっと、秘書は君一人なのかな？ ……それならいいや。仕事が山積みのようにだし。また明日お願いするよ。じゃ」

軽く手を上げると、康貴はそのまま千佳の視界から消えた。

今のはいったい何だったんだろうと首を傾げながら、千佳は仕事に戻ろうとした。

その時、資料室の入り口付近で黒い影が動いた。びっくりした千佳は、思わず叫びそうになり口元を手で覆った。それが誰かわかると、違う悲鳴が漏れそうになった。

そこには、口元を綻ばせている優貴が立っていた。

千佳の心臓が、ドキンと高鳴る。

康貴の笑みには何とも思わなかったのに、何故優貴の優しそうな口元を見ただけで、こんなにも胸がときめくのだろうか？

今でも、優貴の側に近寄ることができないほど、怖いという気持ちはあるのに……

千佳は、全く知らなかった。

いつもより少し早く来てしまった優貴が、資料室に身を潜め、瞼を閉じて一生懸命何かを考えて

いる千佳を見ていたということ。

そして、双子の弟に対して何の興味も抱かず、仕事モードに切り替えて冷静に対応する千佳を、さらに愛おしく想い始めたということ。

一步一步、優貴が千佳に近づいていく。

千佳は、何か強い意思を秘めてこちらに向かってくる優貴を、ただ青ざめながら見ているしかなかった。

「また、仕事を回されてしまったのか？」

千佳は、チラッと自分の机の上にある書類の山を見る。

「今年は……新入社員が秘書室へ入ってこなかったから」

その言葉だけで、全て優貴に通じた。何故か、一番下っ端の千佳の境遇を知っているからだ。

「……夕食、一緒にしないか？」

いつもと同じように一方的な物言いだったが、今日はいつもと違うように聞こえた。

先程、初めて優貴が口元を綻ばせたのを見たからだろうか？

（どうするの？ さつき、考えていたことを実行するの？ それとも、いつものように断る？）

頭の中でどうしようか迷っていると、優貴がさらに一步前へ足を踏み出した。あまりにも千佳の近くへ寄ってきたので、慌てて誘いの返事を口にした。

「……はい」

肯定する言葉が出てきたことに、千佳は驚きを隠せなかった。それは、優貴も同じだったようだ。

目を大きく見開いて、千佳をジッと見つめている。

未だに彼に対して恐怖を感じるが、優貴を見ていると、よくわからない温かなものが胸の奥でトクントクンと高鳴る。

御曹司には、全く感じたことのない感情だ。

「本当、に!? 千佳、ありがとう……」

優貴に初めて呼び捨てにされたあの日以来、彼は会う度に千佳を名前前で呼ぶようになった。迷惑だと思っていたはずなのに、今日は何故か擦ったく感じる。

(わたし、本当にどうしたのかしら。優貴さんが怖いのに……恐ろしいのに、毎回誘うことを諦めず、紳士的に振る舞ってくれる彼と食事したいと思ってしまっなんて)

返事をしたことによつて、いつの間にか優貴と一緒に食事をする日を心の奥では望んでいたと気付かされた。

だが、それを表に出せるほど千佳は強くなかった。

優貴は、会社からほど近い場所にあるタイ風レストランへ千佳を連れていった。

大きなビルの七階にあるレストランは、五階の大きなホールから伸びる専用のエスカレーターに乗らなければ入れないという、少し変わった造りになっている。

レストランに足を踏み入れると、入り口から階段を少し下りる形でフロアが広がっていた。照明が暗く、テーブルに置かれたフード付きのランプが星のように綺麗に輝いて見える。

高級そうなレストランに連れてこられた千佳は、少し不安を覚えた。贅沢とは縁遠い生活を送っているため、こういうレストランで一度も食事をしたことがない。

男性と二人きりで食事をするというのも初めての経験だった。

水嶋家の御曹司の一人でもある優貴と、こういう場所で食事をする場合、どんな態度で接すればいいのだろうか？

促されるまま案内された窓際に座ると、正面に優貴が堂々と座った。

(ああ、彼はこういう場に慣れている！ それなのにわたしは、初めてで……何をどうすればいいのかもわからない！)

「この店のお勧めコースでいいか？」

千佳は優貴と視線を合わすことができず、小さく頷いた。

だが、見かけとは違って心の中は騒然としていた。

まず、コースとなれば値段は高くなる。お財布の中にくら入っていたのか、全く思い出せない。どうしてこんな高級そうなレストランに入る前に、もっと安いお店へ行こうと言わなかったのか、悔やんでも悔やみきれなかった。

さらに、優貴はいつの間にか白ワインの試飲までしている。その姿は優雅で、ウェイターが彼に尽くす執事のように見えた。洗練された振舞い、他者への接し方、全てにおいて気品を兼ね備えている。

優貴が水嶋グループの御曹司の一人だということが、改めて理解できたような気がした。

そんな彼と、共に食事をすることになるとは……

千佳は、どんな血の気が失せてくるのがわかった。膝の上でしっかり握っている両手は、微かに震えている。

「……聞かせて欲しいんだが」

いきなり問いかけられて、千佳はハッと息を呑んで面を上げた。

「何で、しようか？」

表情が強ばっているのを承知の上で、視線が定まらないまま優貴の方へ顔を向けた。上司や役員たちの前では、難なく秘書の仮面を被れるというのに、何故か優貴の前では上手く作れない。

「俺の、弟を見て……どう思った？」

全く予想すらしていなかった質問に、千佳は思わず優貴と視線を合わせてしまった。

「ど、どう……って、特に、普通ですけど？」

質問の意図が読めず、千佳は吃りながら答えた。

（何と答えて欲しいの？ わたしが康貴さんをどう思っているか、なんて……そんなことがどうして気になるの？）

不思議に思った千佳だったが、意味をなさないその答えで優貴は満足したようだった。少し俯いているが、口元が綻んでいるのがわかる。しかも、すぐに面を上げて、好意を示すような視線を千佳に向けてきた。

今度は、千佳が目を伏せる番だった。

（これはいったいどういうこと!? もしかして……優貴さんは、わたしのことが好き？）

恋愛経験ゼロの千佳でさえ、そう思わずにはいられなかった。そう考えれば、千佳を見つめてくるその意味や、今年の一月に突然キスを奪われたことにも納得がいく。

だが、千佳は優貴から好意を向けられたくはなかった。勇気を出して彼の前に座ってはいるものの、優貴から発せられるオーラが怖くて堪らない。

優貴には、御曹司に抱くようなほんわかと温かくなるものが何一つない。彼といるだけで神経がピリピリし、彼が動いたときにビクッと軀が震える。話しかけられても、何と答えたらいいいのかわからず、適切な言葉が出てこない。

御曹司に対してはすんなりと言葉が出てくるというのに、どうして優貴に対してはこうも身構えてしまうのだろうか？

千佳は、恋というものをせず勉強ばかりしてきたので、憧れと恋の違いは何なのか、全く理解できなかった。

まさしく、清純な乙女そのものと言っている。

もし、優貴に対してのみ起こるあの軀の反応の理由がわかっていたら、この後……あんな酷いことは起こらなかつたかもしれない。

千佳は何を食べているのかわからないほど緊張したまま、料理を口に運んでいた。

優貴から話しかけられない限り、こちらからは何も話すことはなく、食事は淡々と進んでいた。

会話がないう状態が続けば続くほど、千佳の緊張はどんどん高まっていく。

食後のデザートが出された時、千佳の神経はピンと張り詰め、いつ切れてもおかしくない状態だった。

その時、優貴が口を開いた。

「千佳は、俺の兄が……まだ好きなのか？」

いきなりの質問に、千佳の心臓がドキンと高鳴った。視線を上げると、こちらを見つめる優貴の目にはいつも以上に力が漲っていた。しかも、少し緊張しているようにも見える。

優貴は、千佳の想い人が御曹司だと知っている。一度、会議室で御曹司に見とれていた時に、彼から叱責を受けたことがあったからだ。

嘘をついてもバレるだけだと思った千佳は、何を訊かれても正直でいようと口を開いた。

「……はい」

「俺よりも!？」

優貴よりも、御曹司の方が大好きに決まっている。頭ではわかっているのに、何故か千佳の口からは言葉が出なかった。

真実を素直に話せばいいのに、それが本当の気持ちなのかわからなくなっている。

(何しているの？ 御曹司の方が好きだって、はっきり言えばいいのに……)

自分の眉間に皺が寄っているとは気付かず、千佳は恐る恐る優貴へと視線を向けたが、すぐに顔を伏せた。

心臓が痛いぐらい激しく高鳴る。握り締めた掌には、少し汗が出て湿気を帯びていた。

優貴は返事を待っている。このまま口を閉ざしていても、千佳の緊張は解けることはない。

だが、何かが引つかかっているように声が出ない。自分でも理解できない感情が、心に訴えてくる。そのことに躊躇いを感じながらも、千佳はこの緊張から逃れるためだけにゆっくりと口を開いた。

「わたしは……御曹司のことが好きです」

その声は囁きに近かった。

「それは、変わらないものなのか？ 俺が、千佳に付き合って欲しいと言っても？」

その言葉に、千佳は勢いよく面を上げた。

(優貴さんが、わたしと付き合いたい？ まさか、そんな……!)

顔面蒼白になりながら、千佳は優貴へと視線を向けた。彼がからかっているのかとも思ったが、そんな風には見えない。

つまり、優貴は本気でそう言っている。

千佳にキスをしたあの日から、彼のアプローチは始まっていた。ここ数ヶ月続いた夕食の誘いは、千佳の中にある警戒心を解かし、彼のことを考えずにはいられないようにさせた。

千佳に、優貴という男を意識させるように仕向けた。

(ああ、わたしは彼の術中に見事嵌まってしまったんだわ……)

千佳は、優貴が嫌いだったのではない。秀でた容姿、威圧的な態度、有無を言わせない鋭い眼光、それら全てを合わせ持つ男性がとても苦手なのだ。優貴は、まさしくこの男性として当てはまった。

だから、優貴とは正反対の御曹司をすぐに好きになった。なのに、今は御曹司よりも優貴のことばかり考えてしまう。

優貴の前ではどうして身構えてしまうのか、何故彼には温かな気持ち湧き起こらないのかはわからない。それでも、千佳の心を支配するのは、いつの間にか優貴へと変わっていた。

彼は、なんと恐ろしいのだろう。

千佳の顔から、さらに血の気が失せた。

(絶対知られてはいけない……。いつの間にか、御曹司よりも優貴さんのことが気になるようになってしまったことを)

「わたし……優貴さんと付き合うことは絶対にありません。優貴さんの弟の康貴さんと、付き合うことはあっても……」

もちろん、康貴のことは何とも思っていない。好意を抱いていなければ、他の女性社員のように近付きたいとも思わない。

にもかかわらず、何故康貴の名を出したのかというと、彼と会った時には、優貴に感じるピンツと張り詰めるような緊張を感じなかったからだ。

いつの日か、男性と付き合う日が訪れるのなら、そういう男性と付き合いたい。そういう理由で、千佳は康貴の名前を出した。

だが、千佳は知らなかった。一人を比べるようなことだけは、決してしてはいけないということ。双子には、双子にしかわからない感情というものがある。特に、優貴は弟と比べられることを極

端に嫌っていた。

そのことを知らない千佳は、知らず知らずに地雷を踏んでいた。

優貴の顔が怒りで赤黒くなり、千佳を凄目で睨んでくる。そうとは知らない千佳は、必死に自分の心を隠すように俯いていた。

——ガシャン！

突然、食器がぶつかる音が聞こえた。

ビツクリした千佳が面を上げると、目の前に座っていた優貴の姿はそこにはなかった。何故いなのかと思つた時、いきなり凄力で手首を掴まれた。

千佳は、あまりにも強い力に顔を顰めた。

だが、見上げた瞬間飛び込んできた優貴の怒りの形相に、手首の痛さはどこかへ吹き飛んだ。

「……優貴、さん!? あの」

「来るんだ!」

いったい何が起つたのか全くわからない。

優貴に引つ張られるまま薄暗いフロアを歩き、躓きながら階段を上る。彼が精算をしなかったことにも気付かないままに、千佳はビルから外へ連れ出された。

(ああ、怖い! どうして、優貴さんはいきなりこんな行動を? しかも彼はとても怒っている! どうして怒っているの? わたしは、ただお付き合いはできないと言っただけなのに……)

このまま新宿駅で別れることになると思っていたが、そうはならなかった。優貴は駅へは向かわ

ず、北東へ急ぐように歩く。

歌舞伎町二丁目……

商業施設へ寄ることはあっても、千佳はその奥の路地へ足を踏み入れたことはなかった。

でも、今……優貴に腕を掴まれて二人でその場所を歩いている。奥手の千佳でも、周囲にあるラブホテルがどういふことをする場所か知っていた。

何かを言いたい、何を言えたいのかわからない。引つ張られるまま、男に黙って従ってはいけない。頭ではわかつているが、いつの間にか恐怖よりも恥ずかしさが勝っていた。

優貴は、視界に入る全てのラブホテルの中から、まるで通い慣れているかのようにモダンな造りのホテルへ入った。

先に部屋を決めようとしていたカップルが目飛び込んでくる。彼らが何をしようとしているのかわかった千佳は、思わずそのカッパルから顔を隠すように俯いた。

そのため、慣れた手つきで優貴が部屋を選んだことにも全く気付かなかった。

再び強い力で引つ張られた千佳は、転びそうになった。そんな千佳に気付くことなく、優貴はエレベーターへ乗り込む。

狭い空間に、二人つきり……

千佳の心臓が激しく高鳴ると同時に、これからどうなってしまうのかという恐怖が湧き起こる。気持ちが悪く着かないままエレベーターが停まると、そのまま優貴に引つ張られて、黒を基調としたモダンな内装の一室へ連れ込まれた。

シャンデリアの光に照らされた大きなベッドは、そこだけが妙に浮かび上がって見えた。ベッドにはサテンらしき黒色のベッドカバーが掛けられ、とても怪しげな雰囲気醸し出している。天井につけられた鏡に何の意味があるのかわからないが、とてもエロティックに感じられた。

(こういうホテルは、男性と女性が裸になって……欲望のまま淫らに振る舞う場所。そういう目的で、わたしを連れてきたのではないよね？ そうでしょ!?)

千佳の勘違いだと言つて欲しかった。レストランを後にしてから一言も発しない彼の口から、安堵できるような言葉を聞きたかった。

だが、千佳の思いは届かなかった。

優貴は、千佳をベッドに放り投げるように手首を離した。突然の行動に、そのままベッドに倒れた千佳はいったい何が起こったのかわからなかった。

長い髪を振り乱して面を上げると、優貴はスーツを脱ぎ捨て、ネクタイを緩めながら千佳を見下ろしている。

「ゆ、優貴さん……」

優貴の目は据わっていた。こちらを凝視しながら、ワイシャツのボタンをどんどん外していく。

「やめて……お願い」

彼が何をしようとしているのか、それは想像でしかわからない。千佳にとって、今起こっていることは未知の世界のことだからだ。

「兄を好きだということは理解できる。だが、俺と康貴とではいつたい何が違うというんだ？」  
レストランを出て、初めて優貴が言葉を発した。

千佳は、優貴が何を言いたいのかわからなかった。

だが、今言葉を繋げなければ大変なことになると思い、この状況から脱するべく口を開いた。  
「全然違うわ！ 康貴さんなら、わたしをこんな風に扱ったりはしない」

そして、こんな恐怖を味わわせたり、彼のことがかり考えさせるような真似は決してしない。理解できないドキドキするような感覚を、送り込んだりはしない。

全てにおいて、優貴と康貴では千佳に与える影響が違う……ということを言ったつもりだった。

だが、説明が足りない千佳の言葉を優貴はそのまま受け止める。そのせいで、彼の怒りはさらに増幅された。

「今夜、康と会った時はほんの少しも興味を抱かなかった。それなのに康のこともわかるというのか!？」

「わかるわ！」

悲鳴に近い声で、千佳は言った。

（わかるわ……わかるわよ。康貴さんは、優貴さんと違ってとても紳士的だった。御曹司もそう。

こうやってわたしの心を掻き乱し、恐れを抱かせ、信じられないような軀の反応を起こさせるのは、優貴さん唯一人だけなもの！）

「俺の……俺の何が駄目なんだ！」

駄目なことなど、何一つない。そう言いたかったが、いきなり優貴が千佳に覆い被さるように軀を押しつけてきた。そして、千佳の顎を掴むと荒々しいキスをする。

「……っん！」

突然のキスに最初こそ抵抗できなかったが、優貴の手が素肌の鎖骨に触れた時、千佳は手を振り回して抵抗した。

「イヤ、やめて！」

唇が離れると同時に、千佳は叫んだ。

こんなことは望んではない。こういう行為はまだするべきではない。心が一つになった時、初めて軀も結ばれるべきだ。今は、まだその時期ではない。

それに、優貴は千佳を愛しているのではない。ただ抵抗し続ける彼女が物珍しいだけ。

そういう思いに辿り着いた瞬間、千佳の心の中で急速に悲しみが広がった。優貴から逃れようと振り回していた腕から、力がすつと抜け落ちる。

脱力した両方の手首を、優貴の大きな手が掴んだ。そのまま、千佳の頭の上で固定する。

優貴は、肩で息をしながら千佳を見下ろしている。既にボタンが外れたワイシャツの隙間から、

優貴の引き締まった強靱な肉体が見えた。

男をアピールしてくるその軀から目を逸らすと、千佳は優貴の顔を探るように視線を向けた。

御曹司には劣るかもしれないが、優貴の顔は女性が振り返ってしまうほど素敵だ。それに、会社での地位と財産もある。身長も高く、余分な贅肉が見られないその肉体は、男性モデルのようだ。

仕事熱心なために言動が冷たい印象を受けるかもしれないが、こんなにも素敵な優貴なら女性なんて選り取り見取りなはず。

（なのに、どうしてその辺の女性たちの中で埋もれているわたしを求めめるの？ 抵抗するわたしが珍しいの？）

「こんなことをして何になるの？ 間違っているわ」

優貴の表情が悔やむかのように歪んだが、それはほんの一瞬だった。

「間違っているかどうかは、後でわかることだ……」

優貴は、既に決意していた。目に宿る強い意思が、それを千佳に伝えている。

「わたしは、優貴さんと……こうなることを望んではないわ」

今はまだ、優貴に肌を見せてもいいという域に達してはいない。恐れを抱いてしまう相手に、どうしてそんなことができるのだろうか？

反面、もう優貴が千佳の元へ夕食の誘いに来なくなると思うと、胸に刺すような痛みが走る。

「では、誰となら望むと言うんだ？」

「優貴さん以外なら誰とでも！」

押し寄せる胸の痛みから逃れるには、そう言うしかなかった。

その言葉に反応した優貴は千佳の首筋の頸動脈を指で圧迫した。息が詰まるような痛みが、千佳を襲う。

「酷い……女だ。俺が、ここまで千佳のことを……想い続けてきたというのに、俺よりも兄や弟を

取るというのか？」

優貴の表情が、苦しそうにどんどん歪んでいく。

過去の恋愛や千佳に目を奪われたこと、心さえも奪われてしまったことを優貴は思い出していた。だが、そのことが千佳にわかるはずもない。

「今度だけは……無理だ。俺は、諦められない！」

千佳の首から手を離すと、優貴はフリルのついた女性らしい千佳のブラウスを、ボタンが弾け飛ぶぐらい力任せに引っ張った。

「キヤァ！」

白いキャミソールが露になると、優貴はそれも引き裂いた。

「やめて、やめて……優貴さん！」

軀を捻ったり足をバタつかせたりして、優貴が気を緩めた隙に逃げようとした。

だが、彼の大腿と腰でしっかり押さえつけられ、千佳は動きを封じられてしまった。

優貴の目に、シンプルなブラジャーが晒される。それは大人の女性が着けるような繊細なレース仕立てではなく、ティーン用の可愛いものだった。社会人らしからぬその下着に、優貴が目を見開く。

恥ずかしくて、千佳の目に涙が溜まった。

（こんな下着を見られたくはなかった。彼が好むような、大人の下着を身につけ、その下にある乳房はブラから零れるぐらいに大きくあつて欲しかった）

そこで千佳は、ハツとした。

何故、優貴が好むような下着や乳房ではないことを気にするのか？

自分の心と向き合いたかったが、ブラジャーの上から優貴が小さな乳房を挿んだため、意識はすぐに自分の軀へと移った。

「まるで、少女のように小さい……」

優貴は、容赦なくブラジャーのカップをずらした。ラズベリーののように熟れた小さな乳首が露になると、優貴はそれを舌で転がし始める。

「い、や……、やめ……っあん」

今まで感じたことのない快感が、軀を一瞬で駆け抜ける。

(これ……何？ いったい何なの!? 勝手にわたしの口から変な声が出るなんて……)

ビクビクした千佳だったが、この襲いかかる快感は嫌いではなかった。この甘い痺れは、クセになつてしまいうようなほど心地好かった。このまま溺れても構わない……と思ってしまうほどに。

軀の芯が熱くなり、秘部までも蠢いてくる。優貴に初めてキスされた時と全く同じ症状だった。いや、それ以上のことが千佳の身に起こっている。

優貴の手が大腿を撫で上げたかと思うと、そのまま千佳の足を大きく開かせた。誰にも触れさせたくない秘部を、パンティの上から触られる。

「……ああっん！」

口から、甘い喘ぎが漏れた。その声で我に返った千佳は、今までギュッと閉じていた目をパツと

見開いた。

だが、目を開けたことで、千佳の中に呼び起こされた官能の熱が急激に下がっていく。天井に付けられた鏡が、今何が起きているのかを全て語っていたからだ。

乱暴に引き裂かれたブラウスにキャミソール、ブラジャーをずらされて見える乳房は重力に従ってべっちゃんこになっていた。蛙のように大きく開いた足は無様で、何故こんな風に優貴にされるままになっているのかわからない。

収まっていた恐怖が、黒い影となって千佳の全てを包み込む。

「やめて！ こんなイヤよ！」

鏡越しに目に入る、優貴の鍛えられた背中から無理やり視線を逸らすと、次は彼の胸板が目飛び込んできた。初めて見る大人の男性の乳首だった。それはとても小さくて色が濃く、硬く尖っているように見えた。

「言っただでしょ、貴方には抱かれたくない！」

(優貴さんに抱かれたいという気持ちに達していないのに、こんなことは無理よ。今は……絶対にできない)

両手首を捕えられている以上、感情を込めて優貴に訴えるしかなかった。千佳は必死になって懇願したつもりだったが、その行為はさらに優貴の怒りを買った。

「俺を否定するな、俺を心から締め出すな！」

彼が何かを訴えているのに、千佳は自分の気持ちに手一杯だった。優貴が千佳のパンティに指を

引っかけて勢いよく脱がすと、自然と意識がそちらへ向く。

「優貴さん、お願い……やめて」

どんどん大きくなる恐怖を堪えながら哀願するが、それは優貴の心に届かなかった。

優貴は、何かに取り憑かれたように突き進む。

千佳の足をさらに大きく開かせると、まだ準備ができていない秘部にいきなり屹立した彼自身を挿入した。

「痛っ！ やめて、痛い……い、イヤあ……きゃああー！」

初めて感じる大きな異物。身が引き裂かれそうなほどの強い痛みが千佳を襲った。

「千佳？ ……ま、まさか、処女だったのか!？」

優貴はやつと千佳の手首を解放すると、涙を流す千佳の頬に触れた。

処女だと知ったその一瞬だけ腰の動きは止まったが、今は微かに揺られて抽送を繰り返していた。

真実を知って軀を離してくれるかと思っただが、優貴は千佳をギュッと抱き締めると、徐々に抽送のスピードを上げていく。

「痛いつ、やめっ……ああ」

千佳は涙を流しながら懇願したが、優貴はやめようとしなかった。次第に千佳の腔内で何かが変わ化していくが、引き攣るような痛みはさらに強くなっていく。

「千佳……、千佳……もうお前を手放せない！」

優貴の荒い息遣いが呻き声に変わった時、彼はやつと千佳から身を離した。

生暖かいものが千佳の太腿にかかる。それが肌を伝って、シートへと流れ落ちるのがわかった。それが何なのか確かめようとせず、千佳はただ涙を流していた。

優貴にレイプされたのだと、彼が千佳の軀を離して改めて理解できた。

初めてのセックスの思い出が、こんな夢も幸せも何もない、肉が引き裂かれるような痛い思いだけになるうとは想像もしなかった。

秘部は、熱をもつて腫れ上がっているような感じがする。さらに奥深い場所は、火傷を負ったような痛みでジンジンしていた。

（これは……わたしの罪。優貴さんにラブホテルへ連れ込まれても何も言わず、まるでセックスを望んだように思わせてしまった。何も言えず、彼に従ってしまったから……こんなことが）

男と女には、深い付き合いもあるのだと知識では知っていたが、まさか優貴がそういうことを望んでいるとは思ひもなかった。

いや、本当は知っていた。女性として見られたくないと思っていたから、あえてその部分を排除しようとしていた。そうしていたのに、いつの間にか優貴のことばかり考えるようになってしまいい、心のガードを緩めてしまった。

「千佳……」

優貴の囁き声が聞こえる。千佳は思わず天井の鏡に映し出された自分の姿を見た。とても、男性から愛されたようには見えない。涙を流し続けるその瞳はとても悲しそうに曇っている。そんな千

佳に恐る恐る手を伸ばし、寸前で引つ込めてしまふ優貴の動作が目に入った。

今まで見えなかった彼の心を、一瞬だけだったが垣間見られたような気がした。その瞬間、レイプされたというのに、何故か急に優貴を愛おしく思い始めた。

千佳を手に入れるために犯した罪は到底正当化できるものではないが、それでも心が彼を許そうとしていた。

優貴と一緒にいれば、楽しさよりも先に恐怖が込み上げてくる。にもかかわらず、彼に見られるだけで胸がトクントクンと高鳴り、他のことは何も考えられなくなる。

この想いが、世間一般で言われている恋だとは思いたくなかった。恋とは心が温かくなり、幸せになれるもの。

優貴に抱く感情とは全く別物だとわかってても、千佳は優貴を嫌いにはなれないと気付いた。

(彼を怖がってはいても、わたしの心が優貴さんを求めている。御曹司には抱けなかった感情を、優貴さんだけには感じてしまったから。…優貴さんが見つめる女性は、わたしだけにして欲しいと、初めて心からそう願ってしまふほどに！)

温かいものが大腿に触れた。

ハツと我に返ると、優貴が千佳の大腿を温かいタオルで拭っているところだった。何を拭っているのかわからないまま、千佳は身を起こした。

瞬間、秘部がズキツと痛んだ。思わず呻き声を漏らす。

「ううっ……」

「大丈夫か？ ……かなり傷つけてしまった」

シートを見ると、インクを落としたような赤い染みがいくつもあった。

(これが、処女の証なのね。どうして、初めての時って、こんなにも痛いのか？ この痛みは最初だけ？ それともずっと続くのか？)

あんな痛みをもう一度体験するのなら、もう二度とセックスはしたくないと思った。

「どうして初めてだと言わなかった？」

初めてだと言ったとしても、優貴は決して行為をやめなかっただろう。やめると懇願しても、彼はそのまま突き進んだのだから。

終わったことについて今さら何を言っても無駄だと思った千佳は、ただ頭を振った。

「シャワーを浴びさせて……」

優貴が千佳に手を伸ばしてきたが、今は触れて欲しくなかった。

千佳は、彼の手を避けるように胸元を隠して立ち上がった。絨毯の上に落ちていた自分の鞆が、目に入る。それを取ろうとして一歩足を踏み出したが、大腿が震えてその場に崩れ落ちそうになった。

振動だけでズキツと秘部に痛みが走る。それでも何とか堪えて鞆を掴むと、曇りガラスで仕切られたシャワー室へゆっくりと向かった。

曇りガラスとはいつてもかなり透けているので、優貴から見えるかもしれない。

だが、既に裸を見られてしまっている。今さら気にしても仕方がないと言い聞かせると、ゆっくりと服を脱いでシャワーの飛沫の下に立った。

ポタツと血が下に落ち、お湯で薄められて排水口へと流れていく。まだ出血は止まっていなかった。幸い、生理不順のためにナプキンはいつも常備している。それで何とかなると思った途端、千佳は安堵のため息を漏らした。

優貴から離れたのは、彼の前にいるときちんと考えることができないからだ。それに、少しでも触られると、また軀が反応してしまいそうになる。それらを全て排除した場所で、一人で考えたかった。

これから、どうするべきか……を。

(優貴さんは、わたしを手放せないって言っていた。……わたしは?)

千佳は、自分の軀をしつかり抱き締めて心に訊ねる。このまま優貴との接点を断つのか、それとも彼を受け止めるのかと。

優貴を失うと思っただけで、軀が震える。彼の前で感じる恐れよりも、今まで受けていた誘いがなくなり、空虚な生活になる方が怖い。

(わたしは、いつの間にか優貴さんを愛していたのね。心が温かくなるような恋ではないけれど、これもまた恋なんだわ。優貴さんのことを考えるだけで緊張してしまうけれど、わたしは御曹司よりも優貴さんを……)

次男という立場だが、優貴もまた水嶋グループ御曹司の一人。いつの日か、どこかの令嬢と付き合うようになる。

でも、その日が訪れるまでは、決して優貴は千佳を手放したりはしない。そう考えるだけで心が

浮き立つのがわかった。

この先に別れがあることは承知しつつも、優貴が千佳を一人の女性として見てくれるのであれば、こんなにも素晴らしいことはないからだ。

(もしレイプをされなければ、わたしの気持ちも徐々に高まって、数ヶ月後には優貴さんと素敵なスタートを切れたかもしれない。そう思うと残念だけ……優貴さんにレイプされなければ、わたしは自分の気持ちに向き合うことがなかったかもしれない)

起こらなかったことを考えるより、起こってしまったことに向き合うべきだと思った千佳は、シヤワーを止めると何とか服を着た。ボタンが全て弾け飛んでいるので、ブラウスのボタンは留められないが、鞆の中に安全ピンが数本入っていたはず。もちろん裁縫道具も入っているが、優貴の前で縫うような真似はしたくない。

何が起こったのか、もう一度優貴に見せつけてしまおうと思ったからだ。

(どうしてわたしは……自分でも関わり合いたくないと思っていた優貴さんを好きになっちゃったの? レイプされた相手だというのに……)

それでも、千佳は彼に言うつもりだった。レイプされたことは心の傷として残るかもしれないが、それでも優貴との縁は切りたくない。

一通り身仕度が整うと、千佳は意を決してシヤワー室を後にした。

優貴に気持ちを伝えようと、千佳は恐る恐る面を上げた。

その瞬間、思ったことを彼に伝える機会は失われた。優貴が凄いい形相でこちらを睨んでいたからだ。

「こんなことになったが、俺は……千佳を諦めない。逃げようとするれば追いかけて、絶対手に入れる。他の男には……絶対に渡さない！」

まるで、千佳が去っていくと思っっているような口ぶりだ。

何がなんでも離れることは許さないと牽制してきた優貴に、千佳は何も言えなかった。もしかしたら、何か言えば良かったのかもしれない。

しかし、彼の前に立つといつも上手く気持ちを伝えられない千佳が、こんな風に怒りに駆られている優貴にきちんと言葉を伝えられるはずもない。

もし、千佳が気持ちを伝えようとしたとしても、こんな状態では優貴の心へは届かないだろう。

だから、千佳は何も言わなかった。ただ目を伏せて、鞆をギュッと握り締めていた。

優貴の前では言いたいことを何も言えなくなってしまう千佳。大切な言葉を言わずに我を通す優貴。性格から見ても絶対重なり合いそうになく、心もすれ違ったままの二人に楽しい未来はあるのだろうか？

いろいろな波乱が待ち受けている二人のラブストーリーが、今始まるうとしていた。

——五月。

「彼とイタリアに行ってきたの」

「いいですね、彼氏とだなんて。わたしは、大学時代の友人とトルコへ」

ゴールデンウィーク明けの、秘書室でのこと。新作ブランド品の品評会のようなものが、先輩秘書たちの間で行われていた。

彼女たちから旅行のお土産をもらった千佳だったが、社会人二年目となった今でも、この価値観の違いに驚かされる。

(どうして、旅行代金が高い時期に行きたがるの？ わたしなら……絶対に行けない)

秘書室では皆パスポートを所持しなければいけないので、千佳も紺色の五年パスポートを作った。そのパスポートは、未だに真っ新ときている。仕事で使う機会がない限り、二十三歳で更新するまですっとインクの臭いはしないだろう。

「千佳はどこかへ行った？」

突然話しかけられて振り向くと、いつも親切に話しかけてくれる同期の桜田だった。

異例で高卒入社をした千佳は、先輩秘書たちから爪弾きにされていた。

だが、桜田だけは周囲の陰険な態度を気にもせず、ずっと千佳を同僚として友達として扱ってくれている。

「いえ、わたしは……」

そこまで言って、千佳は顔を曇らせた。というのも、このゴールデンウィークの初日に優貴から呼び出しを受けた時のことが脳裏に浮かんだからだ。

レイプされた後、優貴はその行為を謝るように千佳を食事へ誘った。

## 立ち読みサンプル はここまで